

東日本大震災での救護活動に参加して

糸魚川市・すずき医院

鈴木 修一郎

東日本大震災発災後2か月後の5月6日から8日まで、石巻地区での救護活動に参加した。構成メンバーは医師1名、看護師2名の3名で、看護師1名は看護協会からの紹介で北日本脳外科病院の看護師さんに加わっていただいた。

糸魚川を午前4時半に出発し、石巻に10時過ぎに到着した。被災地に入って見て特に印象的だったのは、強烈な魚の腐ったような臭いと発災後2か月も経つのにほとんど手つかずの瓦礫の山に埋もれた地区と震災があったとは思われないような日常の生活が流れている地区が、石巻に同時にあることであった。

石巻地区での救護活動は発災後2か月が経ち、石巻日赤を核として組織化されたものであった。救護所では風邪や慢性疾患の患者さんがほとんどで、通常の診療と変わりはない。異なるのは厳しく、つらい経験をしているため精神的に参っている患者さんが多いことであった。

今回、JMATの一員として救護活動に参加するという貴重な経験をさせていただいた。その中で感じたのは①派遣前の情報がなく、被災地に入り何をするのか、単に救護所での診療のみでいいのか、JMATとしての役割が不明確であった。②現地の状況の不案内、交通事情等の不案内があり、2泊3日という短期間では現状のままでは、十分な活動は難しい。そのために専門家のサポートをする、現地に長期滞在する調整員が必要である。

被災地では多くの医療機関が被災しており、中には避難所に残り、自分や家族、診療所が被災しているにもかかわらず、診療できる場所を探し、地元民の診療を続けた開業医も多いと聞く。今回、開業医がJMATに参加し活動できるというシステムが構築されたので、今後、その発展を望む。それがまた、地元での災害時の救護活動につながると思われる。